

子どもの自殺を食い止めようと、絵本の読み聞かせを通して、自分を大事にするこの大切さを伝えていく女性がいます。絵本作家の夢ら丘実果さんです。夢ら丘さんは、親しい友人を自殺で失ったことや、娘の通う学校でいじめが起こったことから、児童教育評論家の吉澤誠さんや聖路加国際病院の日野原重明医師、日本のちの電話連盟の齋藤友紀雄理事たちと絵本を制作し、読み聞かせによる「命の授業」を始めました。

絵本の名前は「カーくん」と森のなかまたち」。全国の小中学校で、これまで六百回以上、読み聞かせの授業を開いています。

絵本は、次のようなあらすじです。

ホシガラスのカーくんは、自分に何一つ取り柄がないことに劣等感を感じていました。自分なんかいない、消えてしまいたいとさえ考えていました。でも、森の仲間たちに、今まで気付かなかった自分の長所を教わります。星のようにきれいな羽模様をしていること、木の実を割って種を運んで若い木を育てていることなどです。それを聞いて、カーくんは自信を取り戻していきます。

夢ら丘さんが読み聞かせをするとき、子どもたちは、まるで主人公に自分を重ね合わせているかのようになり、真剣に聴き入ります。

授業の後、「困ったとき、相談したら、助けてもらえることが

分かって安心した」「悩んでいる人がいたら力になりたい」など、様々な感想が寄せられるそうです。

夢ら丘さんは、いじめなどに遭って悩みを抱えている子どもは、心が弱くなって、心の風邪をひいている状態だと言います。また、そうした子どもの多くは、自分を肯定する自尊感情を高めることが必要だとも言っています。だからこそ心の風邪が深刻にならないうちに、自分の素晴らしさや尊厳に気付いてもらえるよう、活動が続けているのだそうです。

最後に、絵本の一節を紹介します。

カーくんは、さつきゆめでみた森を思いうかべました。

だれもいない、いのちのかけらも感じられなかったあの森が、どんなにさびしかったか…。

ただカーくんは、知らないあいだに、森に新しいいのちをあたえていたというのです。

そして、この森にはこんなに友だちがいて、カーくんからだにはきれいな星空まであるなんて、はじめて気がついたのです。

「みんなが、いてよかった。ぼくも、いてよかった。ぼくも、ぼくでもよかった…」

夢ら丘さんたちは、今後も、日野原先生の「遺志を引き継ぎたい」の「命の授業」を続けていくつもりです。

では、また。